



年頭所感

新年のご挨拶

大阪大学工業会会長

鈴木 胖

新年明けましておめでとうございます。旧年中は本会の活動に多大のご協力・ご支援をいただき、まことに有難うございました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年は内外ともに多事多難な年でした。3月11日に発生した東日本大震災により1万6千人近くの方々が亡くなられ、いまだに4千人近くの方々が行方不明となっています。避難者は約7万人にのぼっています。その多くは福島第一原子力発電所事故による放射能汚染からの避難者です。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災者の方々に衷心よりお見舞いを申し上げます。当会は震災直後に、被災された会員の皆様に間接的ですが少しでもお役に立つようにと、日本赤十字社を通じて義援金100万円を寄付させていただきました。夏の終わりには、台風12号が西日本から北日本にかけて広い範囲に記録的な大雨を降らせ、紀伊半島を中心に甚大な被害が出ました。

欧州ではギリシャの財政悪化に端を発したユーロ圏の債務危機拡大をどう防ぐかが大きな問題になっていますが、11月に入っても問題解決の行方は混沌としています。世界経済への悪影響も懸念されており、これは日本にとっても他人事ではありません。また10月にはタイのメコンデルタに広がった洪水により、この地に進出している自動車・電子機器関連日本企業の多くが浸水し、国境を越えたサプライチェーンの一部が停止しました。日本企業の国際的な生産体制に大きな穴が空き、減産を余儀なくされています。

昨年は日本にとってまさに内憂外患の年でした。わが国の政治の現状も勘案して「日本はどうなるんだろう」という声もしばしば聞かれます。この危機を乗り越えるには、問題を先送りするのではなく、過去のしがらみや既得権にとらわれず互いに痛みを分かち合うという覚悟で、柔軟で新しい発想のもと複雑な問題群の解決に取り組んでいくことが必須であると思います。

懸案となっている、公益法人制度改革に伴う本会の公益法人から非営利型一般法人への移行については、その道筋を昨年の年頭所感でかなり詳しくご説明いたしました。新法人（一般社団法人）へ移行するための新定款（定款改定案）については、まず会誌平成23年4月号に掲載し、会員の皆様からコメントをいただいたのち、5月17日の総会において定款改定案のご承認をいただきました。その後、改定案について文部科学省との協議を重ね、移行申請から認可までの手続きが円滑に進むよう内容を修正してまいりました。具体的には表現の変更、内容の追加・削除等で、改定案

の修正については本質的な問題が生じない限り会長に一任していただいております。予定のスケジュールより少し遅れましたが、11月下旬に内閣府を通じて内閣総理大臣に移行申請を行いました。早ければ本年1月中にも一般社団法人の認可が下りるものと期待しています。

新法人への移行後、本会は新しい定款に従い公益継続事業と共益事業（同窓会活動）という二つの事業を実施します。公益継続事業としては、

(1) 講演会・講習会・見学会等の開催による科学技術の振興並びに知識の啓発（定款第4条第1項第1号）。具体的には、各種講演会の開催及び援助、数学講座の開催、工場・施設・工事現場の見学と関係者による説明・案内、科学技術展示会、ホームページ（『Techno-Net Web』<http://www.osaka-u.info/>）掲載による情報の伝達・啓発活動等の事業を行います。

(2) 大学における教育・研究活動並びに科学技術に関する調査・研究活動に対する援助及び奨学（定款第4条第1項第2号）。具体的には、海外交流活動の援助・支援、大学の科学技術に関する調査・研究活動に対する援助（寄付）、大阪大学工業会賞の授与等の事業を行います。

(3) 研究・科学論文誌等の刊行（定款第4条第1項第3号）。「Techno Net」を年4回（4月・7月・10月・1月）刊行します。

(4) キャリアアップの支援（定款第4条第1項第4号）。学生に対するキャリア教育を振興し、一般社会とりわけ産業界が何を求め、どのような人材を必要としているかを学生に自覚させることを目的としています。このため本会が開催する「キャリアデザインワークショップ」にあわせ、企業の協力を得て各種セミナーを開催し、会員・非会員を問わず学生のキャリア教育を推進します。

共益の事業（同窓会活動）としては、会員を対象とした総会（年1回）、理事会（原則年2回）、支部総会（年1回）、支部役員会（原則年2回）等の開催です。総会時には、講演会・交流会を同時に開催し、科学技術に関心のある会員にとって有益な情報交換会を行います。

新法人門出の年である本年は、上記事業をこれまで以上に積極的に展開していきたいと考えております。

本会活動への皆様の一層のご支援・ご協力をお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

（電気 昭和33年卒 35年修士）



年頭所感

新年のご挨拶

理事・副学長
(応用研究・産学連携担当)

馬 場 章 夫

あけましておめでとうございます。同窓の皆様に心よりの慶賀を申し上げます。工学研究科長のときから、これで4回連続になりますが、今回ほど重い気持ちでご挨拶申し上げる年はございません。今年こそ本当に希望の持てる1年になることを祈念して新年のご挨拶を申し上げます。

一昨年は「大きな変化が起こることを予感されている方が大半ではないでしょうか」と書き、昨年は「今年の活動の結果いかんで、私たちの将来が決まるかもしれないと予感していますが、楽観は許されず、歯を食いしばっていないと本当に倒れそうな状況です」と申し上げましたが、予想もしていない激震に見舞われました。日本は沈没しかねない状況だと思います。どう立ち上がるか、精神力・人間力もふくめて真価が問われます。

この非常時に、大学をはじめとする科学技術を支えている機関がどのように行動するか、どのような結果を残せるかが厳しく問われると思います。即効性のある処方箋を提示できればいいのですが、難しいと思います。一方で、その役割を果たせたところを中心になれるかもしれません。この様な時にこそ、真摯な姿勢で何事にも取り組むべきであり、おかしい行動をとれば、それは社会における信頼を大きく損なうことになります。一昨年の仕分けで悔しい思いをし、今回の震災で、さらに日本の科学技術全体が失墜することの無いように地道な努力を続けるべきだと思います。

このような思いの一方で、すこし不謹慎かもしれないと感じつつも、思い切って新しいことに挑戦したいという気持ちが心のどこかにあります。以下に、その思いを書かせていただきます。

大学のミッションは、突き詰めれば人材育成であると信じています。今はやりの言葉でいえば、イノベーション人材です。まず着手したいのは、博士後期課程の学生を数多く育成することです。挑戦的で高度な研究を通じて才能を磨き、適切な判断力を持った力量ある博士を輩出したい。その博士にあこがれて、修士の学生、学部の学生が博士後期課程に進学する意志を持

つ、そして高校生が阪大の工学部を受験してくれる。そんな夢を見ています。わたしの理事としての役目は、応用研究と産学連携ですので、社会との連携を通じて人材育成を試みることを希望しています。

昨年(2011年)の6月に、吹田キャンパスの真ん中に「テクノアライアンス棟」が完成し、運用が始まりました。期待を上回る勢いと規模で、企業の入居が始まっています。

共同研究講座や協働研究所の仕組みで企業が今までにない規模(研究者数)で入ってこられます。これらの仕組みは「企業が運営する」ことに、今までの共同研究や寄附講座とは違った大きな特徴があります。今までと違った風を大学キャンパスに吹かせたいと考えました。この文章が皆様の目に留まるころには、80%以上のスペースが埋まっているはずですが、そして、企業から多くの研究者が、大学の若い研究者と議論しながら新しいテーマを探して研究しています。この考えは、私の中では決して新しいものでなく、むしろこの危機的な状況になったことによって、思い切れたような気がします。従来の産学連携の中心であった共同研究は、企業がテーマと資金を提供し、大学が研究して結果を企業に渡すというものであり、形式だけを見れば下請け的であり、本当の共同研究とは言いがたいものです。真の意味での共同研究にすべき時期と考えています。企業からも研究者がキャンパスにやってきて、大学の研究者や博士課程の学生と交わりながら共に研究するのが、当たり前になってほしいと思います。企業が大阪大学に希望しているのは、小さな改良にすぎないイノベーションではなく、真のイノベーションであり、ここで取り組むテーマも簡単に解決できるようなものではないと思います。大学はもっと本気になって企業を利用してでも基盤研究を通じた人材育成をすべきです。アライアンス棟はそのための入れ物にすぎません。同窓の皆さまのご理解とご支援を心からお願い申し上げます。

(応化 昭和46年卒 48年修士 51年博士)



年頭所感

新春のご挨拶

大阪大学大学院
工学研究科長・工学部長

掛 下 知 行

平成 24 年の年初にあたり謹んでご祝詞申し上げますとともに大阪大学工業会の皆様のご多幸を祈念申し上げます。

昨年は国内外において、経済の低迷、政治社会の様々な激動に加え、我が国も未曾有の大災害に見舞われ、いまなお復興への明確な糸口がつかめない場面も多い中で迎えた年明けとなりました。

大阪大学におきましては昨年 8 月 26 日から平野総長を新たなトップに迎え、新しい執行部による運営が始まりました。工学部におきましても、昨年上半期において新たな室体制を整備し、独立法人化当初に設置しました評価室と国際交流室を廃止し、それらの室業務を組み入れた「運営企画室」、「教育学務国際室」、「社会連携室」、「財務室」、「総務室」、「情報広報室」の 6 室体制を新たに整備し、運営を進めております。

工学研究科は従来より基礎研究から応用研究に至るまで、世界に誇る研究成果を長年にわたり発信し続けている教育研究機関であり、「世界を先導する研究力」という大きな柱に加えて、「人材育成」がもう一つの極めて重要な柱となっていることは言うまでもありません。特に昨年度は大阪大学の後期入学試験の対応に注力し、平成 24 年 4 月に新入生を受け入れるための入学試験から、後期入学試験を停止し、前期入学試験のみに絞って実施することに致しました。これは本年 2 月に実施する入学試験から適用されます。また、この前期入学試験では、センター試験の成績と大阪大学の専門科目の成績を加味した従来の評価に加えて、理科と数学を得意とする学生を別途設けた得点基準により、一部選抜する入試制度も始めることにしました。これらの取り組みは、志望大学を決める第一段階である前期入学試験時に、大阪大学工学部に是非とも入学したいという将来の有望な人材の確保をはかる改革の取り組みの一つであります。

教育および研究環境への支援のための運用経費ならびに支援体制の整備は極めて重要な課題であり、特に年々削減されている運営費交付金ならびに間接経費に

鑑み、その削減に対処できる財務環境の安定化は今すぐに取り組むべき課題であります。このような財政的問題を抱える中で、上述の魅力ある人材育成と強力な研究力の維持・発展のためには、工学研究科内における組織再編は避けることのできない課題であります。また、学内建物の耐震改修に関しましては、昨年度より本年にかけて、電気系建物・環境エネルギー系建物の一部の改修・新築が進められており、本年春にはこれらの建物の整備作業が完了し、引き続き、機械系・環境工学系・建築系の建物の改修・改築を計画しております。

以上の大学内の研究・教育、社会貢献、管理運営等の諸活動に対しましては、自己評価・外部評価が中期目標の達成に向けて毎年行われておりますが、特に教育に関しましては、短期的な評価ではその本質的な取り組みを適切に評価することは難しく、長期間にわたって常に評価内容をフィードバックできるような運用体制と評価体制の確立も極めて重要な課題であると感じております。

本年 3 月の大震災からの日本の復興には、工学分野からの支援は不可欠であり、私ども工学研究科に課せられた使命は極めて重大です。また現在の日本は、今後我が国が向かうべき姿を全世界から問われているターニングポイントにあります。そのためにも、将来にわたってグローバル社会の発展に恒常的に寄与できる「人材育成」と「世界に誇る研究力の展開」を核に置き、我が国ひいては世界の将来を牽引できる人材輩出に力を注ぐことが肝要であると強く感じております。それとともに、この高邁なる取り組みが国内外から高く評価され、それがまたより一層の魅力となって、将来を担う若い人たちを吸引する工学部・工学研究科でありたいと思っております。

大阪大学工業会会員の皆様からのご支援・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

(学 界)



年頭所感

新年のご挨拶

大阪大学同窓会連合会会長
大阪大学元総長・名誉教授

熊谷 信昭

会員の皆様方にはそれぞれに色々な感慨をもって新しい年をお迎えになられたことと存じます。

日本では昨年3月に東日本大震災と福島第一原発の重大事故が発生し、大勢の方々が甚大な被害をお受けになりました。また、その影響は国内外の様々な分野にまで及び、会員の皆様の中にも個人的に、あるいはお仕事の上で、色々な影響をお受けになられた方もおられることと存じます。これらの方々に心よりお見舞いを申し上げます。

大阪大学も5月1日に予定していた創立80周年記念式典と祝賀会が中止となり、同じく5月3日に開催することになっていた第6回のホームカミングデーの催しも延期され、唯一80周年記念事業の柱の一つとして改装・整備が進められてきた大阪大学会館の竣工記念式典だけが5月2日に執り行われました。

また、海外でも各地で大きな災害が相次ぎ、昨年10月にタイのバンコクで開催を予定していたタイ阪大会も大洪水のため、残念ながら取り止めとなりました。日本にとりましても、大阪大学にとりましても、昨年は多事多難な年であったといえることができると思います。

年も改まり、今年は気分を一新して皆で積極的な発展を目指したいと存じます。今年が会員の皆様方にとりましても、大阪大学工業会にとりましても、明るい、良い年となりますことを願っています。

(通信 昭和28年旧制卒)

年頭所感

年の始めに思うこと

大阪支部長

藤井 宏一

昨年は未曾有の国難を始め色々と暗い出来事の多い年でした。『人間如何なる境地にあっても、心の奥底に喜びの心、感謝の心、報恩の心を持たなければならない。』と学んだ事を思い出しました。

幸い多くの日本人は、被災された方々が一日も早く立ち直るための支援活動、或は義援金を拠出されたことなど、心温まる思いをしました。

一日も早く立ち直られる事を祈る次第です。

扱て日本を取り巻く環境は昨年より一層厳しくなる事と思います。

現状を楽観的に考えて目先の満ち足りた生活を謳歌している人達が沢山居ります。

一方、内外の情勢を見ながら危機を鋭敏に感じて色々の手段を講じる人も居りますが、その数は多くありません。

この混迷の世の中を生き残る為には過去を振り返って無駄を省き、又一利をあげる為には一害を除く。そして、一事（新しい事業）を増やすには一事を減らす（不採算部門）という考えが大切だと思います。

自分自身の分を知り、足るを知り「出处進退」を定め、色々な方々と対話をし、学びながら進みたいと思っております。当然色々な問題が発生するでしょうが、それを解決するには「誠」の心を持って行うことが一番大切と考え、常に自らを省みながら悔いのない良い年になる努力を重ね前進する覚悟です。

(冶金 昭和 26 年卒)

新年を迎えて

東京支部長

池田 博昌

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様には、ご清祥にて穏やかな新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。支部長をお引き受けして 11 年目に入ります。支部の運営に当たり、会員の皆様の温かいご理解・ご協力に感謝しております。

昨年は、東日本大震災で 1000 年に一度と言われる大津波、原子力発電所のメルトダウンと大きな放射能災害で多くの方が被災されましたこととお見舞い申し上げます。さらに、台風 12 号・15 号により 100 年振りの大被害があり、日本中が大変な被害に遭いました。タイでの大洪水、トルコの大地震など自然の大きな変化が顕著になってきました。加えて、ギリシャに端を発する EU の経済危機、急激な円高と経済の低迷、FTA、TPP と貿易への課題、民主党になっても増え続ける赤字国債など、一昨年にも増して日本の前途が危ぶまれるような兆しが顕著になった一年でした。明るい面としては、地上波テレビのディジタルへの移行、東京スカイツリーの完成、スマートフォンの普及、超光速素粒子の発見、スーパーコンピュータ「京」の誕生などがありました。今年は、明るいニュースを期待したいものですが、色々な面での「2012 年問題」が論じられており、心配な面の方が目につきます。

さて昨年は、5 月に開催した支部総会の際には、完成間近の東京スカイツリーの建設についての講演を企画し、好評でした。しかし、恒例の「ビールの会」は震災の関係で中止といたしました。さらに、一昨年から定年前後の卒業生に焦点を当てた講演会と懇親会を 10 月に開催することとし、その名称を昨年から「秋の集い」とし、会社を退職後の人生で起業家として、あるいは海外企業での技術指導で活躍されている会員の経験談を発表頂き、49 名の参加を得て盛り上がる会となりました。

また、東京支部の活動に関しましては、昼食会としての「二水会」、夕方の「二日会」はいずれも会員相互の懇親を深める会として着実に開催しております。二日会には平均 22 名、二水会には平均 16 名の参加があり、毎月賑やかに話題が広がっております。二日会の際に実施している「囲碁同好会」も毎月盛況です。ゴルフの会についても春の会は震災の関係で中止しましたが、秋の会には新しいメンバーへの勧誘が功を奏して、若手の新メンバーを加えた 20 名の会として盛況に開催できました。冬季には「スキー同好会」の活動も積極的に行われております。

四大大行事には 100 名に近い参加者の誘致に努力するなど、6 名の副支部長の絶大なご協力により活性化に努力しております。さらに、少し休会となっていた「旅行会」ですが、東北新幹線全線開通を記念して 3 日間の青森方面の観光とゴルフを楽しむ会として実施しました。

本年も支部活動のさらなる活性化に向けて引き続き取り組みますので、ご期待いただきたいと思います。東京支部の会員諸氏におかれましては、支部の各種催事に奮ってご参加いただきますよう、年頭にあたりお願い申し上げます。

(通信 昭和 34 年卒)